

見代(けんだい)は、国道 301 号線を新城市街から作手方面へ北上し、作手保永地区戸津呂から県道 435 号線に分岐し、車なら 15 分ほどで見代地区に入る。



見代水力発電所は明治 41 年(1908 年)に巴川で水力発電開始。県内で 2 番目に古い。ちなみに 1 番は岩津発電所(1897 年、明治 30 年)。明治 39 年(1906 年)年豊橋市関屋の豊橋電機株式会社(取締役三浦碧水)は、会社設立後間もなく見代に発電所建設する計画を立て、2 年をかけて完成。

建設当時の材料等の運搬は新城の野田城まで豊川鉄道(現 JR 飯田線)で運ばれ、稲木までは牛馬車で、それから臼子辻を経て、常寒峠(和田峠)、見代

口を経て現地へと運ばれた。(『作手村誌 本文編』)。

発電所は昭和 34 年(1959 年)に廃止。その後、建物は見代製茶工場として利用されてきた。現在はその茶工場も廃業している。建物内部は見学できない。

水源は国道 301 号線沿いの野郷と戸津呂の間にある野郷地内にある。水源の場所を証するものとして「明治四十年建立」「豊橋電機第一水源」と刻まれた当時の銘板がそのまま残されている。「社長 三浦碧水」「計画技師 工学博士 藤岡市助」などの名前も刻まれている。

水源から見代の発電所の上にある貯水タンクの中で山の中の木や石で作った送水路で運ばれていた。貯水タンクから発電所まで約 100m の落差があったのでそれを利用して発電された。送水路跡は当時のまま残っている箇所もある。ただし見学や送水路跡を歩くには地権者の許可が必要である。

見代で発電した電気は、作手より先に豊橋に送電した。これは当時、豊橋に陸軍十五師団が誘致され、陸軍が使用するために送電された。作手村に電気が全戸についたのは 1950 年(昭和 25 年)のことだった。

2015 年 7 月、北九州市の旧官営八幡製鐵所関連施設などが世界文化遺産に登録されたニュースが大きく取り上げられ、近代産業遺構に注目が集まるようになった。近代産業が日本の近代化に多大な貢献をなした。その一方で、軍部の大陸侵攻に加担させられ(率先した?)、過酷な労働現場に中国人、朝鮮人を強制連行した例があるなど、それら近代産業遺構はまた、“負の遺産”でもあることにも目をそらしてはいけない。韓国政府が、朝鮮人の強制徴用があったとして八幡製鐵所などの世界文化遺産登録に反対したことも記憶に新しい。

世界文化遺産に登録された近代産業遺構が注目される中、愛知県三河地区にも見代水力発電所遺構などが残されていることを知っておくことは大事なこともかもしれない。まずは歴史を知る。“負の遺産”を“希望の遺産”にしていく不断の努力が必要だ。